

隨泉寺寺報

平成28年（2016年）5月号 第549号

TEL082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

初参式・降誕会法座

講師 住職 自修

講題 『いのちめぐまれて』



浄土真宗の宗祖、親鸞聖人のご誕生のころをご紹介します。
ご誕生 1173年5月21日（承安3年4月1日）平安時代も終わりを迎えようとした頃、京都の南、日野の里でご誕生されました。武士が台頭し、源氏と平氏の争乱のなか、疫病や飢饉、暴風や大地震が続発する混迷した時代でした。
9歳の春、出家得度して日本の仏教の根本道場 比叡山にのぼりました。
20年もの間命がけの修業を積みましたが、すべての人を救う覚りには至りませんでした。苦悩の中で29才で山を下り、お念仏による救いを説く法然様を訪ねました。そして阿弥陀仏の「必ず救う」という願い（ご本願）を素直に受け取り、念仏申す以外に救われる道はないと納得されたのでした。

5月の法座予定

- 5月 2日……………本部役員会
- 5月 9日午前9時より……………掃除 平原上第1 各地区役員
- 5月15日朝席午前10時より……………初参式
- 5月15日朝席終了後……………門信徒会総会 おとき
- 5月15日昼席午後1時より……………降誕会法座 映画『東京タワー』
- 6月 2日午後5時より……………門信徒会本部役員会

☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著「あけぼのすぎ」

—浄土真宗一口法話— 5月

「失敗はむしろ自分を知るために必要な材料である」（平沢 興）

近年、深刻な事件が頻発していますが、悪人が救われるという浄土真宗では、重大な犯罪者でも救われるのですか、という疑問を持たれる方があるとききます。

今、直接の答えは控えますが、こういう疑問がでるのは、「救われる」という言葉の受け取り方に問題があるように思います。「救われる」ことを、良いことをした人がご褒美をもらうようなことと考えると、悪いことをした人に、ご褒美がでるのでは、納得がいきません。



「救われる」ことを、道に迷った人を救う、病気の人を救うことになぞらえると、深刻な人こそ、急いで救われねばなりません。大事なところは、私自身が問題・課題になっているかどうかではないでしょうか。

人間として生きるということは、一生涯では、なし尽くすことのできない大きな仕事を与えられ、さまざまの失敗を重ねてゆくことです。仕事の出来、成果だけで人間を評価されたのでは、自信を持って生きられる人は僅かでありましょう。たとえ、他の人と較べていくらかましだとは言えても、阿弥陀如来さまの前で正しい人生であったと言える人はあまりないでしょう。



迷い続け、失敗を重ねてきた私が、救いの目当てであると喚んでくださるから、阿弥陀如来さまのお慈悲は有り難いのです。

隨泉寺門信徒会総会

隨泉寺門信徒会の総会を開催します。5月15日降誕会法座の朝席終了後、平成28年度門信徒会総会を例年の如く開きます。平成27年度の事業報告や会計報告、並びに平成28年度の事業計画や予算等を審議していただきます。誘い合わせてご参加ください。

春夏秋冬 いつもありがとう

私は、小さいノートを持ち歩いておまして、よろこびが見つかると、それを書きとめておくように努めているのですが、うっかりしていると見すごしてしまいそうな小さく見えるよろこびが、みんな、すばらしい大きいしあわせにつながっていることに気づかせていただくのです。若い頃にはうっかりしていたことの中に、こんな大切なしあわせがあったということを驚くとともに、こういうしあわせにであわせていただけるのは、年とったおかげさまかな、ありがとうと、よろこばせていただくのです。

きゅうりの漬物が 満点の味をひつさげて わたしのために

かぼちゃも 茄子も 長豆も それぞれが それぞれの最高の味をひつさげて

わたしのたるんだ胃袋に 目を覚まさせるために

さんしょも 食卓に 梅ぼしもその横に もったいなすぎる もったいなすぎる

せめて わたしも きゅうりの漬物のひときれにでもなって

どなたかの胸に よろこびの灯をともしたい

さんしょの一粒にでもなって 生きがいを失っている人に

生きがいの 目を覚まさせてあげたい 思いあがるなど

叱られてしまいそうな気もするが……



- 《初参式》 - 5月15日午前10時より

皆さんは、我が子・我が孫の誕生のとき、心に何を思いその瞬間を待たれましたか？それは「この世に生を受ける喜びと、親子として・家族として寄り添い力強

く生きていくこと」ではなかったですか？共々に力強く歩み出す人生の最初に、阿弥陀さまの御前で「初参式」を受ける事は、浄土真宗のみ教えの中で生かされ生きていくという、第一歩を歩み始める事でもあります。お念仏に生きる真宗門徒として、「初参式」を受けられることをお勧めいたします。



赤ちゃんが仏の子として育ち、これからの人生を仏さまのお慈悲に包まれて生きていけるよう、人生の出発にあたり、その誕生を仏さまにご報告する式です。

平成27年生まれの皆さん、どうぞ一生に一度のことです。お参りください。

映画 《東京タワー おかんと僕と時々オトン》

映画 空前のベストセラーとなったリリー・フランキーの同名自伝小説をオダギリジョー、樹木希林主演で映画化した感動ドラマ。

原作者と同じ福岡出身の松尾スズキが脚本を担当。監督は「バタアシ金魚」「さよなら、クロ」の松岡錠司。共演に松たか子、小林薫。また、若い頃のおカン役を樹木希林の実の娘、内田也哉子が演じて話題に。



1960年代、オトンに愛想を尽かしたオカンは幼いボクを連れ、小倉から筑豊の実家に戻ると、妹の小料理屋を手伝いながら女手一つでボクを育てた。1970年代、15歳となったボクは大分の美術高校に入学、オカンを小さな町に残し下宿生活を始めた。1980年代、ボクは美大生となり憧れの東京にやって来るが、仕送りしてくれるオカンに申し訳ないと思いながらも学校へもろくに行かず自堕落な日々を送ってしまう。留年の末どうにか卒業したものの、その後も相変わらずフラフラした生活を送るそのまま東京の美大へ進んだボクは自堕落な生活を続けていたが、いつのまにかイラストレーター兼コラムニストとして食えるようになってきた。そんな矢先、「オカンがガンの手術で入院した」という知らせが入る。オカンを故郷にひとり残していた僕は東京へオカンを呼び寄せる。しかし、がんは確実にオカンの体をむしばんでいく…そういう内容の映画です。母親と息子の生き方、愛情…。「ボク」が必死に母親に声をかけるシーンは、こちらも思わず涙してしまうほどです。「東京タワー～オカンと僕と、時々オトン～」をまだ見ていないというひとは、ぜひ一度ご覧になってみて下さい。

「家族とは何か」、そのことがとても良く解る、そして身近にいる人を愛したくなる映画です。